

## 11) インゲンマメ＝隠元豆

インゲンマメはダイズ(08-01-11)やアズキ(08-01-12)、落花生(08-01-13)などと同様に世界を代表するマメの一つで、栽培面積は世界のマメ科の食用作物の中では最も広く、とくにインドでは主食の一部としても利用され、世界中で大事な食料になっている。またインゲンマメは年に何回も収穫できることから、日本でもニドササゲとかサンドマメの異名もあり、きわめて効率の良い作物だった。原産地は南アメリカで、メキシコ中央部からグアテラマ、ホンジュラス付近で、新大陸発見後ヨーロッパに移入され、これが中国を経由して日本にもたらされたというわけである。イギリスでは『kidney bean』とか『garden bean』、アメリカでは『snap bean』。フランスでは『haricot』、中国では『眉兒豆』と呼ばれている。学名は『*Phaseolus vulgaris*』で、属名はギリシャ語で丸木舟を意味し、これは莢(サヤ)の形状に由来する。種小辞は「普通の」という意味で、栽培面積が広くきわめて一般的に見られるためである。和名の由来は中国からの渡来僧であった隠元禅師が中国より伝えたためで、承応3年(1654年)、徳川家綱の時代のことである。

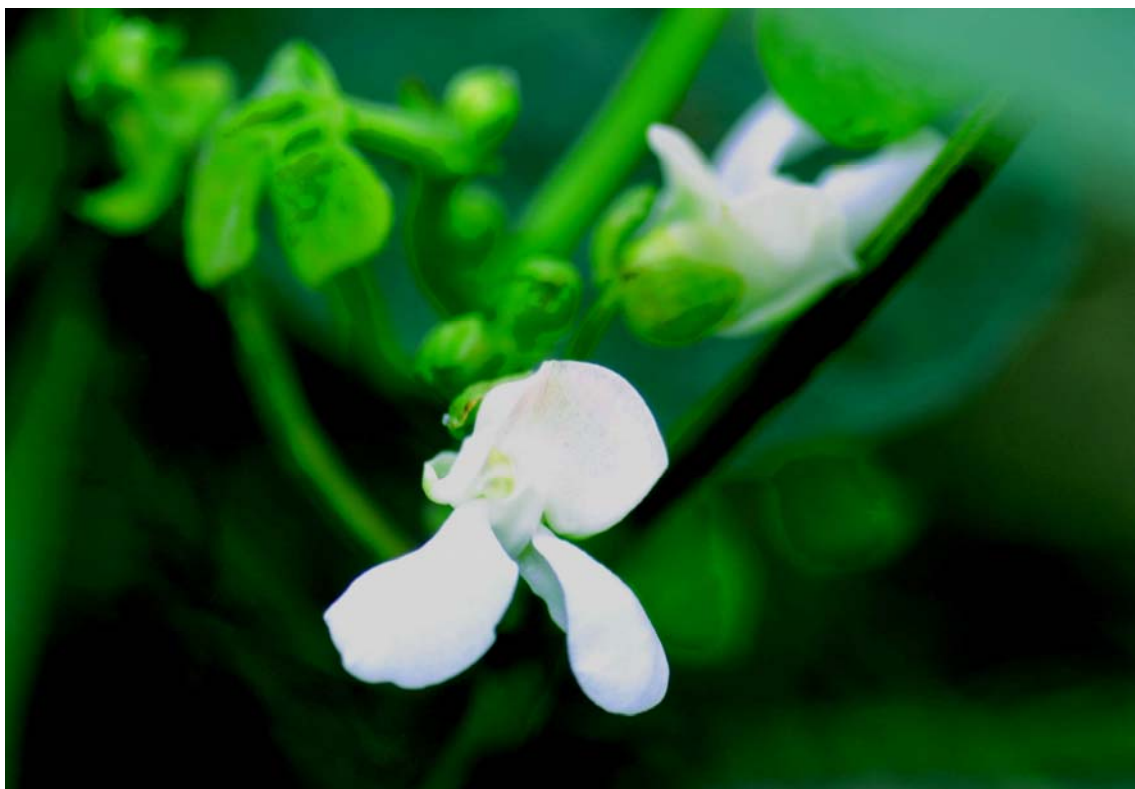
隠元禅師は幼少時代に父が旅に出て行方不明となったため、成人すると父を探しに旅に出るものの、父を見つけることが出来ず、宿泊した寺で、出家することを思い立ち、一旦家に帰った。しばらくは在野のまま仏を崇拝していたが、母の死をきっかけに29歳のときに出家。黄檗山(オウバクサン)萬福寺住職『費隱通容』(ヒインツウヨウ)のもとで臨済宗の正伝を得て、46歳の時、費穩の後を継いで萬福寺住職となり、63歳のときに弟子20人とともに来日した。来日した理由はいくつかあったようで、その第一は長崎の興福寺で住職を務めていた明からの渡来僧『逸然性融』(イツネンショウユウ)が、ぜひ日本に来て正統な禅を広めてほしいと熱心に誘ったこと。この時代、中国では明朝の末期で、北方民族であった後の『清朝』との間で、戦闘や焼き討ちなどが頻繁に起こり、国内が騒然としていたこと、隠元自身も年齢を考えたとき最後の転機と考えたことなどをあげることが出来る。ともかくも隠元は来日したのだが、将軍徳川家綱は彼を厚くもてなし、中国にいた時と同じ萬福寺を京都に建てさせ、これが日本での黄檗宗の始まりとなったわけである。

さて隠元の来日により、日本の禅宗はその厳しい戒律などを見て、大きな影響を受けることとなった。黄檗宗は臨済宗の一派であったが、もともと修行の厳しい禅宗の内部から、新たな自己改革が求められるようになったのである。そして臨済宗よりもむしろ曹洞宗の中に改革意識がみなぎったと伝えられている。日本にもおくれればせながら、宗教改革が芽生えたと見ることも出来る。隠元の来日は、実はインゲンマメよりも、こちらのほうが大きな意義を持っていたといえよう。

さてインゲンマメには柔らかい莢を食べる品種と、完熟した豆を食べる品種とに大別することが出来る。前者はサヤインゲンと呼ばれるもので、後者は、煮豆にしたり、和菓子の餡の原料にしたりしている。



モロッコインゲンマメの花、インゲンマメより扁平な果実をつけるが、やわらかく野菜同様に調理できるため、最近では栽培量も消費量もふえている(さいたま市緑区)。



インゲンマメの花は純白で可愛らしい(さいたま市緑区)。



インゲンマメには種類が多いが、これもインゲンマメの花である(埼玉県川島町)。



インゲンマメの若い果実。やわらかくて食べごろである(さいたま市緑区)。



四角マメの花、こんなに愛らしい花だが果実は四角いというより？下の写真のようになる。しかしお味のほうはもう一息で経済栽培されることはない(さいたま市大宮区)。



なんとも不思議な形の果実である。自然は時々こんな悪戯をする(さいたま市大宮区)。 [目次に戻る](#)